

捕獲効果実証試験について（素案）

- 1 区域の設定方法：西部地域の瀬切川と海との間に挟まる瀬切地区を南北に分断して区域を設定した。
 - 2 森林の現状：県有林は林齢 40 数年程度の広葉樹二次林、国有林は林齢 165 年程度の天然林で、国有林の痩せ尾根にはヤクタネゴヨウも生育する。
 - 3 被害の現状：下層植生はヤクシカの忌避植物しか生育していないが、シカの立ち寄れない岩棚では、ツルランやカンツワブキなどの希少種も僅かにみられる。
 - 4 推定頭数：200 頭
西部の瀬切地区（203.2ha 内訳：国有林（79.0ha），民有林（125.2ha））の生息頭数を、密度調査結果等から算定（暫定値）した。
 - 5 捕獲予定頭数：160 頭（20 頭/km²）
 - 6 捕獲手法：（要検討）
観光客が多い箇所であることから、県道から見える範囲での捕獲は実施しない。
 - （1）集中捕獲区域
捕獲場所まで近く（林道から 30 分以内の箇所）、地形もなだらかな区域
シカの痕跡が最も多く確認される区域であり、囲い柵、くくり罠を中心に集中的に捕獲を実施する。
捕獲目標頭数：100 頭
必要人工数：200 人・日
5 人×40 日（捕獲効率 0.02（屋久島署の捕獲効率の 1/2）、罠数 25 個/人）
 - （2）その他区域
捕獲が実施出来る場所において銃猟による捕獲を実施
捕獲目標頭数：60 頭
必要人工数：50 人・日
5 人×10 日（捕獲効率 1.31（栗生地区の捕獲効率））
- （配慮事項）
- ・観光客や研究者等の入林者がいる可能性もあるので、安全対策については万全を期すこと。
- 7 処理方法：埋設処理
西部林道から近い場所で捕獲した場合は、別途準備箇所で埋設する。西部林道から遠い箇所で捕獲した場合、その場に埋設できるか検討

8 モニタリング等

(1) 植生

(希少種) ツルラン・ヤクシマラン (山腹)、リュウビンタイ (沢沿い) が、シカの立ち寄り可能な場所でも見られるようになる。

(草 本) カンツワブキが、シカの立ち寄り可能な場所でも見られるようになる。

(木 本) ボチョウジ・バリバリノキ・ヤマモモに対する被害が少なくなる。

(木本：萌芽枝への被害) スダジイ・マテバシイ・ウラジロガシ・ウバメガシ等シイ・カシ類の萌芽枝に対する枯れ等の被害がなくなる。

(木本：角研ぎ被害) 希少種のヤクタネゴヨウ成木に対する角研ぎ被害が少なくなる。

(土砂流出) 西部林道上側法面のシカの上り下り道 (うじ道) が少なくなり (4~5 本 / 100m)、西部林道への土砂流出がなくなる。

(2) 生息密度

(生息密度調査 (糞粒調査)) 糞粒コドラート法を実施する。

